



ディストリビューションラウンドテーブルの記録

Record of the Distribution Round Table

T_EX ユーザの集い 2011 実行委員会 The Committee of the T_EX Conference Japan 2011
texconf11@googlegroups.com

KEYWORDS T_EX distribution, Linux distribution, Japanese T_EX environment, packaging

ABSTRACT The session “Distribution Round Table” was held in the T_EX Conference Japan 2011 on 22nd October, 2011. The object of this session was to introduce Japanese T_EX distributers or packagers of each platforms, T_EX distribution developers, and T_EX engine developers to one another, and to share and discuss their problems. They discuss many topics by almost clarifying what is the difference between Japanese localized T_EX environments and the original T_EX Live environment. The topic of the updmap (update map) for mapping Japanese Kanji stood out, and the difference in Japanese Kanji mappings of the updmap would be merged in the upstream of the T_EX Live. In other topics, they shared and discussed how do many Japanese T_EX users typeset documents and preview the resulting DVI/PDF files with or without synchronizing their source T_EX files. They also introduced that the T_EX Live system has a local repository system.

ディストリビューションラウンドテーブルは、2011年10月22日に東京大学生産技術研究所で開催された「T_EX ユーザの集い 2011」の中のひとつの企画である。日本語 T_EX を配布している各OSディストリビュータ、T_EX パッケージ管理者および T_EX ディストリビューション開発者、T_EX 関連エンジンの開発者が集まって、顔合わせと、課題共有などの議論を行うことを目的とした。議論においては、日本語 T_EX 環境と T_EX Liveとの差分を明らかにする形で議論が進められ、とくに updmap (update map) のパッチ採用について進展の兆しが見られた。ほかにも xdvi の日本語対応と日本における標準的なタイプセット・プリビュー手順についての議論、エディタ=ビューア間ジャンプ機能の知識共有、T_EX Live におけるレポジトリ機能の紹介などが行われた。

1 自己紹介・ポジショントーク

取りまとめの武藤さんを起点として、順に自己紹介とポジショニングトークを行った。席は一部を除き自由席とした。着席順（天井から見て反時計回り）と所属ほかは以下の通り。（全景は図1を参照のこと。）

- 武藤 健志 (取りまとめ, Debian プロジェクト)
- 小林 準 (Ubuntu Japanese Team)
- 柴田 充也 (Ubuntu Japanese Team)
- Norbert Preining (T_EX Live 開発チーム, Debian プロジェクト T_EX メンテナ)
- 黒木 裕介 (Cygwin で日本語 T_EX プロジェクト)
- 小林 泰三 (MacOS X WorkShop (OSXWS))
- 北川 弘典 (ε -pT_EX 開発者)
- 松鶴 琢人 (Gentoo プロジェクト)
- 青田 直大 (Gentoo プロジェクト)
- 濱田 龍義 (福岡大学, KNOPPIX/Math Project)
- 岡山 友昭 (Fink チーム)
- 山本 貴則 (The MacPorts Project コミッタ)
- 土村 展之 (ptexlive 開発者)
- 藤原 誠 (NetBSD 開発者)
- 山本 宗宏 (Project Vine)
- 佐々木 洋平 (Debian JP プロジェクト)



図 1. Panorama of the table. (Pictured by Haruhiko Okumura and trimmed by the editors.)

2 議論

$T_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live 2011への追加日本語パッチについて 北川さんから $T_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Liveにおける日本語対応の現状について解説があり、 ε - $pT_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ と $pT_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 本体が採用されていること、 $x\mathrm{dvi}(k)$ の日本語対応版である $px\mathrm{dvi}$ と日本語 METAPOST の $pmpost$ は採用されていないことが示された。また、北川さんがまとめている「 $T_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live 2011への追加日本語パッチについて」http://sourceforge.jp/projects/eptex/wiki/Tex_Live_2011について紹介が行われたが、位置づけは個人的に使うレベルであると表明された。

$W32T_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ のソース公開について 日本語 METAPOST をきちんと提供しているのは $W32T_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ だけだという話題から、 $W32T_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ のソース公開についての情報交換が行われた。ソースは公開されているものの、機能ごとにパッチになっているわけではない、バージョン管理されているわけではない、といった制限があることが共有された¹。

updmap (update map) の日本語パッチ フォント設定を一元管理するためのユーティリティ *updmap (update map ; アップデートマップ)* に対して日本語のフォント選択やフォント埋込みの制御を行うためのパッチは、 $T_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live に現在は含まれていないが、Preiningさんが改修できると断言してくださった。 $ptexlive$ で整理を続けていた土村さんから、そのパッチで採用されている日本語を表すための表現が Kanji になっていることについて着席者に対して相談があったが、変更に関しての決定は土村さんに任せることで合意が取れた。

$x\mathrm{dvi}$ の日本語対応 X Window System 上での標準的な DVI プリビューアである、 $x\mathrm{dvi}(k)$ の日本語パッチと上流の開発元との関係について、 $x\mathrm{dvi}\mathrm{k}$ 日本語化パッチ整理プロジェクトのメンバーでもある土村さんから次のような解説があった：一口に $x\mathrm{dvi}$ の日本語化と言っても、下流から、日本語化パッチ・Kpathsearch 対応・本家という三層構造になっている；Kpathsearch 対応を行っているチームが一時期取り込む意欲があったが機を逃してしまった；現在は Kpathsearch 対応を行っているチームの開発も停滞していて早急な進展は期待できない。

日本における標準的なタイプセット・プリビュ一手順 $x\mathrm{dvi}$ の日本語対応について話題が出た一方で、DVI プリビューの必要性が薄まってきたとの提言があった。Windows でも、ファイルをロックしてしまう Adobe Reader ではなく、Sumatra PDF という PDF ビューアを使えば、快適な編集閲覧環境が作れることが紹介された。また、その議論の過程で、エディタ=ビューア間の連携機能である、Sync $T_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ と src-special についての情報共有が行われた。ただ、ディストリビュータとしてどのように対応すればよいかの指

1. 後日、阿部紀行さんの日記に $W32T_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 開発者の角藤さん本人と思しき方からソース (`w32tex-src.tar.xz`) に関する情報提供があった。 <http://d.hatena.ne.jp/abenori/20111105>

針まではまとまらなかった。さらに、統合環境として TeXworks が話題に上り、国内での認知度が上がっており、着席者もおおむね好印象を持っていることが共有された。

環境整備を確認するためのテスト ディストリビュータとして環境整備の完成度を計るためのテストの話題も取り上げられた。T_EX Live にも最低限のテストは存在するが、日本語が出力の面で合格しているかまでは確認できない。文字の入る箱レベルでの組版結果が、あるバージョンから変わってないかどうかを確認するためのテストは準備できそうな見込みはある。しかし、出力が意図したとおりかどうかは最終的には目で確認するほかなく、テストセットの作成は、ディストリビュータの役目というよりも、現業で利用している編集出版業界も関わるべきだとの提言があった。

Debian のパッケージングについて *Debian* における日本語 T_EX のパッケージングについて歴史と現状が報告された。日本語 T_EX に関してはパッケージャがしばらく不在となり、teT_EX (ptetex でもない) から更新されていない。理由としては、地域固有の大きな環境 (ptexlive) をそのまま採用するのではなく、採用されている上流 (T_EX Live) の産物をできるだけ生かしたいという *Debian* のポリシーとの食い違いによるとのこと。

OTFパッケージと CTAN, T_EX Live ptexlive 以上を採用しているシステムでは、JIS コード (ISO-2022-JP) で扱える文字の範囲内であれば、pT_EX, ε-pT_EX は UTF-8 の入力を受け付けられる。ただし JIS 範囲外の文字を出力するためには、OTF パッケージを使う必要がある。しかし、OTF パッケージは T_EX Live に入っていない。巨大だという懸念はあるものの、マクロパッケージであることもあり、CTAN に登録するのが筋であるという「正論」の前で立ち止まった。

T_EX Live レポジトリ機能 T_EX Live にはレポジトリという機能があつて、本家に取り込まれていないプログラムなどをインストールさせることができることが Preining さんから紹介された。上流の変化にどう追従するかの疑問が呈されたが、まずはどのくらいの差分を提供しなければならないか整理するようにとの提案がなされた。